

論説

肩水金関を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡

高村 武幸

はじめに

漢代では内郡・辺郡の区別が存在したことは広く知られている。

郡守、秦官、其の郡を治めるを掌る、秩二千石。丞有り、辺郡は又た長史有り、兵馬を掌る。秩皆六百石。

『漢書』百官公卿表⁽¹⁾

辺郡太守各おの万騎を將い、障・塞・烽火を行^めりて虜を追う。長史一人を置き、兵馬を掌る。丞一人、民を治める。兵の行^いくに当りては、長史領す。部都尉・千人・司馬・候・農都尉を置く、皆民を治めず、衛士を給さず。

『漢旧儀』下⁽²⁾

上記の史料や渡邊信一郎氏の指摘を参考にすれば⁽³⁾、辺郡には漢の支配領域周縁部に位置、または管轄区域内に異民

族と認識される集団を包摂し、部都尉府が設置されるなど軍事色が強いという特徴がある。この辺郡と内郡との関係については、多くの研究が蓄積されてきた。内郡（生産）―辺郡（軍事）の役割分化を述べる飯田祥子氏、内郡の物資を国家的物流により辺郡に供給したとする渡邊信一郎氏らの研究が例示できる。⁽⁴⁾筆者も特定の辺郡に特定の内郡の戍卒が継続して配属される傾向があると指摘した。⁽⁵⁾

これらはいわば国家体制・制度面からの研究といえるが、一方で、居延漢簡や敦煌漢簡など、漢代河西（甘肅省西部一帯）地域から出土した史料には、内郡出身の民衆が公務や兵役による徵発によらず辺郡に赴いた事例が多い。彼らが辺郡に赴いた理由を探ることで、体制・制度とは別の視点から、内郡―辺郡の関係を考察する手がかりが得られよう。

またこのことは同時に、一般民衆の移動をも説明することになる。伝舎などの旅行者用施設は戦国期以来存在していたが、それらは公用旅行者用であった。⁽⁶⁾また漢代民衆には農民が多く、長期間耕地を放置できるのか、⁽⁷⁾戸籍を通じて民衆一人一人を把握する「個別人身支配」の運用上、国家が民衆の移動や旅行に抑制的ではないか、⁽⁸⁾という点から、従来は民衆の長距離・長期間の移動については懐疑的にみられがちだった。しかし、それにしては史料にみえる辺郡へ赴いた民衆の事例は数多い。

本稿ではこれらの点を、一九七二・七三年にA32肩水金關遺跡で発掘された漢簡にみえる通行証「伝」「致」を中心に検討する。同遺跡は、漢代においては河西回廊から弱水沿いに北上し、居延県へ至る途上に設けられた関所であった。角谷常子氏が指摘される通り、⁽⁹⁾辺境防衛組織である候官に属した中小の関所であるが、逆にそのような

関所を通過した人々の記録であるからこそ、様々な示唆を与えてくれるであろう。

なお本稿では、一九三〇年代出土居延漢簡中のA32出土簡については「一九三〇年代居延漢簡」、一九七二・七三年のものは「肩水金関漢簡」と称する。

一、肩水金関出土簡牘中の関連史料とその集計

(一) 伝と致

最初に、検討の基盤となる史料や語句について確認する。本稿で「民衆」とした場合、官吏や官吏に準ずる地位にある者⁽¹⁰⁾、または兵役・力役に徴発された者、これら以外の人々を示す。彼らが直接的には個人的な必要で行なった用務を「私用」と称する⁽¹¹⁾。

内郡から私用で肩水金関を通過した人々の記録として最も重要なものは、通行証「伝」である⁽¹²⁾。以下に民衆の私用(商用)の伝の事例を示す。

甘露四年正月庚辰朔乙酉南郷嗇夫胡敢告尉史臨利里大夫陳同自言爲家私市張掖居延界中謹案同母

官獄徵事當得傳可期言廷敢言之正月乙酉尉史贛敢言之謹案同年爵如書母官獄徵

事當傳移過所縣侯國勿苛留敢言之正月乙酉西鄂守丞樂成侯國尉如昌移過所如律令／掾干將令史章(正面)

甘露四(前五〇)年正月一八日、南郷嗇夫の胡、尉史に申し上げます。臨利里の大夫、陳同が「家のために張掖居延の管轄区域内で個人的売買をしたい」と申し立てました。謹んで調査したところ、同には裁判にかかわ

肩水金関を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡

高村

一三七

る出頭命令はなく、伝を取得できます。期間も問題ありません。廷に言上願います。以上申し上げます。正月一八日、尉史の贛、申し上げます。謹んで調査したところ、同の年爵は書類の通りであり、裁判にかかわる出頭命令はなく、伝を（発給）できます。通行する県・侯国に送り厳しく留められることのないよう願います。以上申し上げます。正月一八日、西鄂守丞で楽成侯国尉の如昌、通行する所に送る。律令の通りに執行せよ。掾干将・令史章

西鄂守丞印（背面）

（肩水金閼漢簡 EJT10:120, A32）

肩水金閼出土の伝は、通過者が所持する伝の内容を肩水金閼で複写したものと考えられる。なお、伝については紀年が明確なものもあり、本稿で使用した伝の中の紀年簡は末尾附表に集計を掲げた。前漢宣帝期が多いが、それ以降の王莽期まで一定数みられる。鈴木直美氏の集計によれば、⁽¹³⁾肩水金閼漢簡紀年簡は、宣帝期のものが多めではあるが、前漢昭帝期〜両漢交替期まで存在している。本稿で「前漢後半期」と称した所以である。

肩水金閼を通過した人々の史料として他に「致」がある。致について本稿では青木俊介氏の理解に依拠し「旅行者が所持する規制対象品が規制内である旨証明したもので、本文と致籍から構成される」とする。⁽¹⁴⁾本稿では旅行者に関する情報が名籍形式で記された致籍を利用する。その記載内容には幅があるが、旅行者の本籍地の他、年齢や字、身体的特徴や乗車・家畜等の所持品情報が記される。民衆のものと思われる事例を例示する。

河南郡雒陽常富里大夫張益衆年廿六歲黑色長七尺二寸四月甲辰入 牛車一兩

（肩水金閼漢簡 EJT24:50, A32）

河内溫中侍里汪罷軍年卅八字君長 乘方相車驪牡馬一匹齒十五 八月辛卯入

（肩水金閼漢簡 EJT26:35, A32）

饒得新成里公乘王利年卅二長七尺二寸黑色牛車一兩

十二月戊寅出
弩一矢五十

〔肩水金閼漢簡 EJT37.1583, A32〕

これらの史料は、肩水金閼を通過した民衆の本籍地を記している点で、民衆の辺郡への移動を考えるために好適な史料である。そこで、伝と致籍で民衆のものと思われる事例を集め、その本籍地について郡国ごとに集計した上で、検討の材料とする。

（二）集計の内容について

次に、集計に利用した史料を、どのような基準で選抜したかについて述べる。

伝については、既に註（12）所掲などの先行研究により、私用の伝・公用の伝でそれぞれ特徴的な語句や書式が判明しており、例えば、「私市」や「毋官獄徵事當得傳」といった語句があれば、伝の申請者自身の情報が欠落していても、民衆の私用の伝かどうかの判別がつく。それらのうち、本籍地が明確な事例を集計した。本籍地の確認には、伝に申請者の戸籍があればそれを探り、不明な場合は伝の発給県がわかればそれを本籍地とした。^{（15）}

伝に比べて致籍は欠損があった場合、他の名籍類との区別が難しい点がある。前掲の三例のように、写真から完形または記載内容の欠損はないと思われる致籍の事例をみると、民衆の致籍は、官職名や戍卒・田卒などといった身分を示す語句がなく、本籍地・姓名・年齢といった情報の他、①所持品、②身長、③「黑色」などの顔色、④字、⑤「出入」関連、これらの記載が少なくとも一つは記されている。そこで、こうした記載があるか、欠損はあるが残存する文字などからあったと判断される事例について、「致A」として集計した。ただし、明らかに他の人の保

護下にある事例（例：「葆」と明記がある事例）や、そう推測させる事例（例：五歳以下の幼児の事例）は採用しなかった。

一方、身分を示す語句の記載がないものの先の①～⑤の記載を欠くものや、欠損により①～⑤の記載の有無が判然としないものもある。一例ずつ掲げておく。

淮陽新鄭陽安里卜免

（肩水金閼漢簡 EJT2.71, A32）

河内郡溫倚林里楊衆五十五

（肩水金閼漢簡 EJT4.19, A32）

前者の事例は特に欠損はなく官職や身分を示す記載もないが、①～⑤の記載もない。例に掲げた EJT2.71 は、EJT2.72・73・74 と淮陽郡新鄭県出身者が連続し、しかも EJT2.74 は「淮陽新鄭當市里周餘 逋」と、逃亡を意味する「逋」字があり、⁽¹⁶⁾力役などで徴発された民衆の致籍である可能性も否定できない。後者の事例は欠損により①～⑤の記載の有無が確認できない。こうした事例は、民衆の致籍かどうか不明瞭な点がある点を考慮し、「致 B」として集計した。その上で、伝・致 A・致 B それぞれの集計結果と全体の合計数を「表一」として掲げ、また利用した簡の簡番号は「附表」として末尾に掲げた。

二、肩水金閼を通過した民衆の本籍地郡国について

以下、集計結果を元に作成した表を元に検討していきたい。「表一」では、郡国の大まかな地理的位置を把握しやすいよう、司隸と一三州、辺郡を基準に郡国を分けて表示した。

表一 郡国別の伝・致数と割合

部	郡国	伝数	伝%	致A数	致A%	致B数	致B%	合計数	合計%
司隸	京兆尹	5	6.7	16	8.0	7	3.5	28	5.9
	左馮翊	2	2.7	1	0.5	-	-	3	0.6
	右扶風	6	8.1	11	5.5	6	3.0	23	4.8
	弘農	-	-	4	2.0	2	1.0	6	1.2
	河南	18	24.3	51	25.7	43	21.5	112	23.7
	河内	3	4.0	9	4.5	11	5.5	23	4.8
	河東	-	-	2	1.0	8	4.0	10	2.1
并州	太原	-	-	1	0.5	-	-	1	0.2
	上党	-	-	-	-	2	1.0	2	0.4
冀州	魏	-	-	2	1.0	8	4.0	9	1.9
	鉅鹿	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
兖州	東	-	-	-	-	3	1.5	3	0.6
	陳留	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
	定陶・濟陰	-	-	1	0.5	4	2.0	5	1.0
	大河	-	-	-	-	6	3.0	6	0.2
	淮陽	-	-	2	1.0	17	8.5	19	4.0
豫州	潁川	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
	汝南	1	1.3	-	-	2	1.0	3	0.6
	梁	1	1.3	-	-	5	2.5	6	1.2
	沛	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
	魯	-	-	4	2.0	-	-	4	0.8
荊州	南陽	6	8.1	3	1.5	8	4.0	17	3.6
青州	齊	2	2.7	2	1.0	3	1.5	7	1.4
揚州	会稽	-	-	-	-	3	1.5	3	0.6
益州	蜀	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
西北辺郡	安定	-	-	1	0.5	-	-	1	0.2
	隴西	-	-	1	0.5	1	0.5	2	0.4
	武威	-	-	1	0.5	-	-	1	0.2
	金城	1	1.3	-	-	-	-	1	0.2
	張掖	28	37.8	80	40.4	42	21.0	150	31.7
	酒泉	1	1.3	5	2.5	13	6.5	19	4.0
	敦煌	-	-	-	-	1	0.5	1	0.2
	代	-	-	1	0.5	-	-	1	0.2
合計	—	74	100	198	100	200	100	472	100

※%の数値は小数点第二位以下切り捨て。以下、同じ。

表二 張掖郡県別伝・致

	伝数	伝%	致A数	致A%	致B数	致B%	合計数	合計%
饒得	7	25.0	54	67.5	28	66.6	89	59.3
氏池	-	-	10	12.5	3	7.1	13	8.6
昭武	3	10.7	7	8.7	5	11.9	15	10.0
居延	16	57.1	6	7.5	4	9.5	26	17.3
日勒	-	-	1	1.2	1	2.3	2	1.3
屋蘭	1	3.5	1	1.2	1	2.3	3	2.0
驪軒	-	-	1	1.2	-	-	1	0.6
刪丹	1	3.5	-	-	-	-	1	0.6
合計	28	100	80	100	42	100	150	100

まず気が付くのが、肩水金閼が位置した張掖郡に本籍地を有する民衆が一番多いことであり、伝と致Aでそれぞれ四割程度、致Bを含めた全体では三割以上を占める。いわば地元である以上は当然ともいえるが、張掖郡民が比較的活発に移動していたことがわかる。そこでまず、張掖郡と他の河西の郡を中心とした地域からみていく。張掖郡民を県別に示したのが「表二」である。張掖郡二八例を数える伝の中では、居延県民によるものが一六例と六割近くを占める⁽¹⁷⁾。これは、居延県民は移動に際して例外なく肩水金閼を通過せざるを得ない地理的条件があるためであろう。ただし、居延県民の致の事例は多くはなく、残存状況に偶然の偏りが生じているとも考えられる。全体的に多いのは太守府所在地の饒得県で、ここが張掖郡の中心であったことを示している。

伝で判明する目的地については近隣郡国が多く、居延県民は「張掖・酒泉郡中」が多いが、居延県が発給した伝に「爲家私市張掖酒泉武威金城三輔大常郡中」（肩水金閼漢簡 EJ13.774）と、関中までを目的地とする事例がある。他にも発給県名・申請者戸籍が不明で集計に入れなかったが、「取傳爲家賣牛長安」（肩水金閼漢簡 EJ13.774）と記した事例がある。この事例は肩水金閼を通過して長安へ向かう居延県民と推測されるが、河西について「涼州の畜は天下の饒為り」とする

表三 伝の取得目的

私市 () 内は発給県名		私使 () 内は発給県名	
河南郡雒陽	T1.80, T25.185, T30.243, T33.41	京兆尹	T37.1076 (長安)
河南郡	T10.40 (河南), T37.692 (偃師), T37.1075 (原武)	右扶風	T23.897 (雍)
河内郡	T25.7 (温)	南陽郡	T31.20 (宛), T31.34 (宛)
京兆尹	T24.132 (長安)	張掖郡	T33.40 (刪丹), T37.521 (屋蘭), F3.175 (麟得)
南陽郡	T10.120 (西鄂), T10.121 (宛)	金城郡	T37.1451 (允吾)
張掖郡麟得	T6.39, 15.19	不明	T37.400 (甘陵)
張掖郡居延	T9.62, T10.313, T25.15, T32.45, T33.39	簡番号の EJ 表記は省略した。	

『漢書』地理志の一節を想起させる。

取得理由を「私市」「私使」と記した伝の各郡の事例を示したものが「表三」である。残念ながら事例数はそれほど多くないが、「私市」が張掖郡で七例(内五例が居延県)あり、伝の取得理由として商行為が一般的な理由として挙げられていたようである。兩漢交替期の事例であるが、一九七〇年代居延漢簡「建武三年候粟君所責寇恩事」冊書で、甲渠候の粟君から魚を運送し販賣まで委託される業務を請け負った寇恩が、居延県から麟得まで出向いた例を想起すれば、居延県民は必要物品の売買などで麟得に出向く必要が度々あり、それで不足であれば関中あたりまで赴いていたのであろう。

一方、居延県民以外では、刪丹県から「爲家私使之居延」(肩水金閼漢簡 EJ 33.40)、屋蘭県から「爲家私使居延」(肩水金閼漢簡 EJ 37.521)という事例がみられる。「私使」をしようという理由は不明だが、一つの推測としては、居延県所在の張掖郡出身少吏・卒らとその家族や知人の間で連絡が必要となり、居延県と本籍地との間を往来した可能性が考えられる。官吏の家族には関所を複数回通過可能な「家屬符」があり、戍卒や家屬符の範圍内に入らない官吏の親族・知人などであろうか。他にも註(15)で述べたように、本籍

地ではない居延に耕地を有する人々もいるので、全てが戍卒の家族や官吏の親族とはいえないことは当然であるが、居延をはじめとする辺境防衛機構の存在が、郡内移動を促す要因になったとみることが許されよう。⁽²⁰⁾

張掖郡以外の西北辺郡としては、酒泉郡が伝・致A・致Bの合計数として多い。これは、酒泉郡が張掖郡の隣郡で、かつ弱水の上流にあたる呼蠶水（現・北大河）や羌谷水（現・黒河）に近い県が多く、居延と比較的往来しやすい地理的条件がもたらしたものであろう。

次に、西北辺郡以外の郡国に目を移すと、極めて広範囲の郡国からの民衆が肩水金閼を通過している事実があらためて明確になる。河西四郡だけで三〇四割を占めるものの、逆にみれば六〇七割が河西以外からの人々であり、従来の居延漢簡中ではほとんど事例がなかった、会稽や斉など遠方の地域の民衆も肩水金閼を通過していることが読み取れる。民衆の移動が広範囲・遠距離で行なわれていたことは疑うべくもないだろう。その中でも突出して多いのが河南郡の民衆である。伝・致A・致Bいずれにおいても張掖郡に次ぐ二番目の事例数があり、史料の残存状況の偶然的偏りでは説明できない。第三節で考察したい。

指摘しておくべきは、居延漢簡で居延都尉府・肩水都尉府へ戍卒を多く出して郡国の民衆がさほど多くないことである（註（5）所掲拙稿・周宇論考参照）。例えば、拙稿での集計でA8甲渠候官出土漢簡の戍・田卒出身郡国の上位一〇四位を占めていた魏郡は合計%で一・九%、東郡〇・六%、南陽郡三・六%、河東郡二・一%となっており、四郡合計で一割に満たない。また肩水都尉府指揮下の戍・田卒出身地として多かった淮陽郡は合計%で四・〇%、濟陰郡（定陶国）は一・〇%となっていて、六郡合計でようやく一三%を超える。他の郡国に比べて突出して多いと

はいえない。つまり、戍卒を多く居延方面へ出していた地域であつても、同一地域の民衆が私用で多く居延方面へ赴くことを選択したとは限らなかつたのである。これは、国家が関与して行なわれた戍・田卒らの移動と、民衆の自発的な移動との差が表れたもので、国家関与の下で継続的に実施された特定地域からの特定地域への戍・田卒の移動が、移住を伴わない民衆の私用による移動には大きな影響を与えなかつたことを示す。商行為を目的とする移動では、各民衆がより多くの経済的利益を得られると判断した地域を行先に選ぶが、その際に自己ないし近隣の人々の兵役経験などで事情がわかる地域であるかどうかは、選択基準として重視されなかつたことになる。

無論、地理的な位置を勘案すると、やはり一定の偏りがみられる。司隸校尉部の三輔・弘農・三河の地は、河南郡を除いても、六郡あわせて合計%で一九・四%を占める。これに河南郡を加えると四三・一%となり、張掖郡を上回る。これは、何らかの国家の関与があつたのではなく、人口密集地であることに加え、物理的な距離にしても交通路にしても、河西との往来に比較的便利であるためと考えられる。両漢交替期の混乱期に、三輔、とりわけ西方の右扶風を本籍とする者が河西に流入している事例が『後漢書』にみられることもその傍証になろう。南陽郡が合計%で三・六%を占めるのも、武関・長安經由で比較的河西に行きやすく、河南郡などと条件が似ているためであろうか。

このように偏りはあるとはいえ、かなり広い範囲からやってきて肩水金関を往来していた民衆らであるが、彼らが居延まで赴いた理由は何であろうか。無論、大半が伝に記されたように、「家の為に私に使い」するか、「家の為に私に市い」するかのいずれかに類する目的であつたろう。しかし、前者ならば相手が居延にいるため肩水金関を

往来する必要があるが、後者の場合、居延に遠方から来るだけの商業上の利点があるのであろうか。

まず想起されるのが、河西は東西交易路東端の交通の要衝であり、その交易の末端に関わって利益を得たいと考えた可能性である。しかし、河西回廊は本質的には関中と西域とを結ぶ交通路に過ぎず、河西自体で交易が盛んであったことを示す史料は皆無で、⁽²²⁾大都市長安を擁する三輔地域・雒陽を擁する三河地域の人々が、河西の、それも主要ルートから外れた肩水金関を往来する必要はない。

しかしながら、伝に記された「爲家私市」という用務が全くの方便でのみ記されたとは考え難い。とすれば、何らかの経済的な理由があつて河西や居延の地を選択したと考えられるが、こうした東西交易が盛んというわけでもない辺境郡県で内郡の人々を引きつけられるものは、涼州の家畜などといった特産品の他は、貨幣以外ないのではないか。

⁽²³⁾ 永田英正氏が指摘されたように、辺境の軍事地帯やその周辺は、内郡より定期的に運ばれる賦銭が供給されていた。⁽²³⁾ しかも、河西地域の郡県は設置が新しいだけに人口も少ない反面、賦銭供給の目的である、俸給支払いの対象者である官吏の数は、辺境防衛組織の存在もあつて他の郡県と極端な差はない。人口を基準にすれば、河西での貨幣流通量は相対的には「多い」といえよう。また、穀物などの物資を官僚機構が恒常的に買い上げており、交易が盛んではない反面、一定の官需が常に存在した。以下に例を掲げておく。

出錢四千三百卅五 糴得粟五十一石石八十五

(一九三〇年代居延漢簡 276.15, A8)

出錢四千五百八月乙丑給令史張卿爲市 □

(一九三〇年代居延漢簡 258.4, A8)

出錢二百買木一長八尺五寸大四韋以治罷卒籍令史護買□

(一九七〇年代居延漢簡 EPT52.277, A8)

さらに辺郡の吏民が内郡産物品を個人的に購入するため、後掲の居延漢簡等から明らかなように一定の民需も存在する。貨幣を得たい者の行先として選択肢となる地域といえる。

漢代の貨幣については様々な先行研究があるが、佐原康夫氏は前漢後半期の段階において、国家の財政手段としての性格が強いと指摘している。⁽²⁴⁾ 個々の一般の民の立場では、それは銭納を原則とする税という形態で現れるが、⁽²⁵⁾ そのために銭の入手を必要とした。居延漢簡にも、内郡で徴収された賦銭の袋に付された検が複数存在する。

廣 秋 五千 王德少三

鄉 賦 □佐四

(一九三〇年代居延漢簡 21.1A, A8)

熒 陽 □ 秋賦錢五千 東利里父老夏聖等教數

西郷守有秩志臣佐順臨

□□親具

(一九三〇年代居延漢簡 45.1A, A8)

このため、農民であれば、農作物やその他の産品などを売却して貨幣を入手することとなる。しかしその際、居住地近傍での売買で必要な量の貨幣を確保できるとは限らない。多田狷介氏によれば、前漢後半期以降、地方豪族が地方商業の担い手として出現するが、『四民月令』にみえる豪族の月別売買リストから、個々の小農民の收穫物が豪族によって收穫期には安く買われていたと考えられるという。⁽²⁶⁾

であれば、民衆の中には同じ品物でより多くの貨幣を得るため、伝を取得して、⁽²⁷⁾ 比較的貨幣が多く出廻っている辺郡で、官府の官需や内郡の物産を購入したいと考える吏民を対象とした個人的売買を行なおうとする者が出現す

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡 高村

二四七

るのではないか。

二月戊寅張掖太守福庫丞承熹兼行丞事敢告張掖農都尉護田校尉府卒人謂縣律曰臧它物非錢者以十月平賈計案戊田卒受官袍衣物貪利貴賈貫豫貧困民吏不禁止浸益多又不以時驗問

(一九三〇年代居延漢簡 4.1, A8)

二月戊寅、張掖太守の福、庫丞の承熹（太守丞の業務を代行）、張掖農都尉・護田校尉府に通告し、県へ通達する。律には「その他の盜品は錢でないものは、一〇月の平均價格で計算する」とある。考えるに、戊・田卒は官給衣服を受領すると利益をむさぼって高い價格で貧困な民にかけ売りをしているが、禁止しなければ拡がって益々増え、また時期をみはからって監査しなければ…

よく知られた、戊卒官給衣服類の売買行為で利益を得ようとする戊卒らの行為が問題とされた史料である。ここでは戊田卒による官給品の売買であるが、内郡から「爲家私市」を目的に赴いた民衆らも同様の商行為を行なったと考えられる。居延漢簡（肩水金閼漢簡を除く）を用いて、売買關係簡を整理した角谷常子氏によれば、取引物品は纖維製品が多い⁽²⁸⁾。これは戊卒らが官給衣類・纖維製品を売却するためでもあるが、

神爵二年十月廿六日廣漢縣甘鄭里男子節寬惠賣布袍一陵胡隧長 張仲孫所賈錢千三百約至正月□□任者□□□

□□□□

（敦煌漢簡 1708/T.IV.b.191）

と、戊卒以外の者も纖維製品を持ち込んで売却しており、かさばらず比較的高価に売れることが期待できる品物が、河西では纖維製品であったことを示唆しよう⁽²⁹⁾。これ以外にも、多種多様な物品が持ち込まれていたことは戊田卒ら

の売買から容易に推測される。

これら内郡から来た民衆の中には、経済的・労力的負担を軽減すべく、近隣の民衆同士が共同で遠距離の売買を実施したと考えられる事例もある。

□ 與同里張利中自言爲家私市張掖酒泉□□持□□□

□……□

(一九三〇年代居延漢簡 37.29, A32)

…同里の張利中と「家のために張掖酒泉…で個人的売買…」と申し立てました…

□ 弘敢言之祝里男子張忠臣與同里

□ 年卅四歲譚正□大夫年十八歲皆毋官獄

□□ 勿苛留止如律令 / 令史始□□

(一九三〇年代居延漢簡 340.6, A32)

…弘申し上げます。祝里の男子張忠臣が同里…は年三四歳、譚正□は、大夫、年一八歳で、皆公用・裁判にかかわる…はなく…通行する県・侯国は厳しく留めることのないよう、律令の通りに執行せよ。／令史始□…

これは共同で遠隔地での売買に従事した可能性を示唆する事例といえるだろう。⁽³⁰⁾張掖郡民の例ではあるが、こうした場合は「同伝」と称し伝を同じくしていたようである。

鯀得成漢里薛□□年卅四年七月中與同縣男子趙

廣同傳今廣以八月中持傳出入……

欲復故傳前入……

(肩水金閼漢簡 EJ18.106A, A32)

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡

高村

二四九

饒得成漢里の薛□□、年齢三四、この年の七月中に同県の子趙広と伝を同じくした。今、広は八月中に伝を持って出入し……また古い伝で前に入……したいと……

以上の史料から、河西地域には戍田卒や徙民などの国家によって作り出された人の流入以外に、自発的に他地域と往来する人々の流れが継続的に存在したことが窺える。

推測になるが、前漢後半期ごろの為政者・官吏らは、民衆による物資や貨幣の移動は全国的物流の一環を為すものとして捉えていたのではないか。漢代にはいわゆる国家的物流が存在していたが、国家的物流が運ぶ物資や貨幣は、一義的には辺郡など郡国の財政需要に應ずるもので、間接的に辺郡民衆の生活の中に入ったとしても、個々の需要に應ずるものではなく、郡県行政機構においても日々の業務の中で生ずる雑多な需要を満たし得ない。これらの需要が満たないままでは、郡県行政や地域社会の安定は望めない。そこに、このような民衆による物資や貨幣の移動が意味を持ち、また国家的物流により辺郡へ運ばれた貨幣は、一部が辺郡へ売買に来訪した内郡民衆により内郡へ還流することになる。この他、涼州特産の家畜も、前掲 EJT37.774 のように内郡に運ばれたと想定される。これを支えたのが、規制はあるものの移動を禁じることはない漢の緩やかな統制であった。無論、異姓諸侯王国が多かった漢初などの政治的状況や、流民が発生するといった一時的な状況によって、統制への強弱が生じたことは否めず、常に緩やかな統制であったとまではいえない。しかし、前漢後半期の居延・敦煌では官が個人的売買をある程度把握しており、⁽³²⁾そうした物流に関わる情報を得ていた為政者らには、河西に郡県が設置された前漢後半期ごろには、統制しすぎないからこそ物流面での効果が生まれ、後述する常平倉のような政策にも利用できるといった点

は、ある程度認識されていたのではないか。

ところで、これまで民衆による物資の輸送・販売を「私的」「自発的」としてきたが、民衆をその方向へ誘導すべく国家による関与や奨励が実施された可能性はどうか。宣帝五鳳三（前五五）年～元帝初元五（前四四）年に行なわれた「常平倉」をみよう。

寿昌遂に白すらく、辺郡をして皆倉を築かしめ、穀賤き時を以て其の賈を増して糶し、以て農を利さん、穀貴き時は賈を減じて糶さん、名づけて曰く「常平倉」と。民之を便とす。
『漢書』食貨志⁽³³⁾上

これは穀価が安いと高めに購入を、高いと安めに売却を実施することで、穀価調整と辺郡への穀物供給に寄与させる政策であるが、民間から購入することで輸送費用の削減にも寄与したと指摘されており、⁽³⁴⁾高めの売却益を目的に辺郡へ穀物を輸送する民衆もでたことが推測される。常平倉は一〇年で終了しており、一時的なものであるが、国家が辺郡への物流を誘導した事例といえよう。末尾附表の集計によれば、常平倉が施行されていた期間の有紀年伝の数は、三八例中一五例で、その中で張掖郡外からの事例は一一例である。もともと宣帝期の紀年簡が多いこと⁽³⁵⁾もあり、常平倉の影響があつたとして得る事例数かどうか判断が難しいが、やはり一定の影響はあつたと思われる。このような政策が実施されて効果を上げた点で、民衆による物資の輸送・販売は完全に「自発的」で「私的」な動機から発生したものばかりではない。しかし、一方で民衆側がこの政策に自ら乗る状況にならないと効果が薄いのは明白であるため国家の一方的な主導によるものでもなく、どちらかといえば民衆が辺郡へ物資を運んで利益を得ようとする継続的な動きを、国家的物流の補完として積極的に利用したという側面が強いように思われる。

ただし、これまで本節で述べてきた考え方には一つ問題点が存在する。制度上は一般民衆が伝を取得して遠隔地へ赴き商行為をすることは、従来考えられていたより困難なことではないにせよ、実際には彼らが大量の生産物を積載して遠隔地へ赴くには時間と費用がかかる。札忠簡によれば、中家上層の資産を持つ家であれば牛車や牛を所有していたが、それらは運送以外に農業などにも用いるものであり、また中家中層以下の家では牛や車がない場合もある。共同での販売をしても、それだけで全ての民衆の必要を満たせたかも疑問である。この問題を考えるにあたり、前述の多数の河南郡出身者の存在が手がかりとなる。節を改める。

三、河南郡出身者と全国的物流

先にもみたように、河南郡出身の民衆の事例数は他郡国を大きく引き離している。なぜこのように河南郡出身者が多いのであろうか。

辺郡に利があれば、各郡国でその利を求めて河西へ赴く者がいるが、その数は各郡国の人口に比例する。河南郡は大都市雒陽を擁し、『漢書』地理志によれば前漢末の段階で人口一七四万二七九人を持つ大郡であるから、当然数が多くなる。さらに河西が比較的近く、関中まで水運も利用できる地理的条件が加わり、結果的に河南郡出身者の事例が増加した、という要因が考えられる。これは否定し難い要因であるが、より近い三輔や、南陽郡のように水運を除き遠近でいえば地理的条件が河南郡と大きく変わらず、かつ人口も一九四万二〇五一人を擁する郡の出身者の事例が多いとはいえないことまでは説明できない。

表四 河南郡民出身県一覧

	伝数	伝%	致A数	致A%	致B数	致B%	合計数	合計%
雒陽	8	44.4	24	47.0	18	41.8	50	44.6
滎陽	3	16.6	14	27.4	8	18.6	25	22.3
河南	1	5.5	4	7.8	7	16.2	12	10.7
緱氏	-	-	3	5.8	3	6.9	6	5.3
卷	-	-	2	3.9	3	6.9	5	4.4
偃師	3	16.6	1	1.9	-	-	4	3.5
穀成	-	-	-	-	2	4.6	2	1.7
原武	1	5.5	1	1.9	-	-	2	1.7
新鄭	-	-	-	-	2	4.6	2	1.7
平	-	-	1	1.9	-	-	1	0.8
鞏	-	-	1	1.9	-	-	1	0.8
陽武	1	5.5	-	-	-	-	1	0.8
梁	1	5.5	-	-	-	-	1	0.8
合計	18	100	51	100	43	100	112	100

河南郡は商業が盛んで知られた地で、

周地は柳・七星・張の分野なり。今の河南雒陽・穀成・平陰・偃師・鞏・緱氏、是れ其の分なり。（中略）周人の失は、偽りに巧みにして利に趨り、財を貴び義を賤しみ、富を高しとして貧を下とし、喜びて商賈と為り、仕宦を好まず。

『漢書』地理志・下⁽³⁷⁾

とある。肩水金閼の伝・致の河南郡出身者の出身県名を調べると、『表四』にみえる県名の多くが、『漢書』地理志に明記された県名と重複している。『漢書』に滎陽がないが、雒陽の東隣で、地理的には同一とみなして構わないであろう。このため、雒陽を中心とする河南郡出身の民衆については、単に自らの生産物をできるだけ高く販売に行くといった人々ではなく、商業自体が主たる生業になっている人々と考えられる。

先に示したように、多くの民衆が自らの生産物なるべく高く売りたいと希望したであろうが、実際に高く売れる河西などへまで運び、販売するとなると、個人では難しい面がある。穀物は重量・体

積ともかさばり輸送には負担であろうから、個人として生産地から直接陸上輸送で河西へ向かつて利益がでるのか疑わしい。繊維製品など他の物品を選択したとしても、旅行の時間や費用の負担は決して軽いものではなく、個別の家族単位で遠方まで行つてなお利益が見込める程のまとまった生産物を用意するのも難しいのではないか。従つて一番現実的なのは、高く買ってくれる者に居住地や近隣の都市で売却することとなる。そのような形でまず各地の都市に集積された物品を、河西などより高く売れる場所に大量に転売する人々もまた存在したと思われる。彼らが、『漢書』地理志にみえる河南郡の利にさとい人々であつたのではないか。場合によっては、河南郡出身者が直接、各地へ出向いて生産物を買付けるといったことも想定される。そうした売買に関わつた一群の人々の中で、実際に河西まで物品を輸送した人々が、肩水金閼漢簡にみえる河南郡出身者と考えられる。

無論、地方市場の存在は黄今言氏⁽³⁸⁾らも指摘しており、河南郡以外の各郡県の商人の中で生産物を買集めた者が、河西へ販売することあつたであろう。光武帝の事例を示す。

地皇三年、南陽荒饑し、諸家の賓客多く小盜を為す。光武吏を新野に避け、因りて穀を宛に売る。

『後漢書』光武帝紀⁽³⁹⁾上

『東觀漢記』の世祖光武皇帝紀によれば、このとき「上の田独り収む」と、光武帝の農地が被害を免れ穀物が収穫できたので、高く売れるという見込みの元で宛へ販売したと考えられる。『史記』貨殖列伝において、「宛も亦一都會なり。俗は雜にして事業を好み、賈多し」と称された宛県は、肩水金閼出土漢簡中の南陽郡出身者一七例中九例となる⁽⁴⁰⁾。こうした市場で南陽郡の人々が売却した物品を同地の商人が買い集めて河西に持ち込む、ということはある。

り得るだろう。同様に、『史記』貨殖列伝中で河内の地名として「温・軹は西のかた上党に賣し、北のかた趙・中山に賣す」と記された温県は河内郡出身者二三例中一七例となる。⁽⁴⁾紙幅の都合で他の郡県についてはこれ以上詳述できないが、肩水金関出土漢簡にみえる民衆の出身郡県で数量の多い郡県は、『史記』貨殖列伝や『漢書』地理志などの史料で商業が盛んな地域として名前が挙げられたものもある。すると第二節でみたように、兵役で河西を訪れた者の多い地域が、私用で河西を訪れた地域と重複しないのも、河西に対する知識の有無に関わらず、自ら河西に赴くより、手間と費用を考えて商人に地元で売却するか委託販売を選択する者が多かったためではないか。

また、肩水金関を複数回通過した者の事例が河南郡出身者の致にみられる。

河南郡雒陽榆壽里不更史勢年卅長七尺二寸黑□

(肩水金関漢簡 EJT37.1220, A32)

河南郡雒陽榆壽里不更史勢年廿四長七尺二寸黑色 五月辛□

(肩水金関漢簡 EJT37.1445, A32)

これが単なる年齢の書き間違いなどでなければ、六歳違うということ、六年後に肩水金関を再度通過していることとなり、史勢が六年にわたり本籍地を変えずに居延に在住していたのでなければ、複数回の肩水金関の通過は、この史勢が定期的に肩水金関を通過して河南郡と居延、遠距離を往復することを生業としていた者だと推測させる事例といえよう。

なお、肩水金関を通過した河南郡出身者らは商業を主たる生業としていると述べたが、彼ら自身が商人であるかどうかとは別問題とせねばならない。というのは、以下のような河南郡の「將車」事例が散見されるからである。

將車河南絢氏薪里大夫李我年廿七長七尺二寸黑色牛□

(肩水金関漢簡 EJT37.132, A32)

肩水金関を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡 高村

二五五

魚三千頭

將車河南雒陽直里公乘董賢年五十五長七尺二寸黑□

□□□二□

(肩水金閼漢簡 EJT37.830, A32)

魚四百頭

將車河南營陽新安里不更龍眉年卅三長七尺二寸黑色 豪卅五□ 牛車一兩弓一矢五十

出□□五十匹 卅四…入

(肩水金閼漢簡 EJT37.1006, A32)

將車河南雒陽緒里公乘李定國年廿八 長七尺二寸黑色 正月己丑入 牛車一兩 十一月戊申出入

(肩水金閼漢簡 EJT37.1080, A32)

類似的事例は『史記』にもみえ、やはり河南郡滎陽の人の事例となる。

任安は、滎陽の人なり。少くして孤にして貧困、人の為に將車して長安に之き、留りて求事して小吏と為り、未だ因縁有るにあらずして、因りて名数を占著す。『史記』田叔列伝・褚少孫補記任安条⁽⁴²⁾

「將車」については、これを肩書とみなして本稿での集計には参入していないが、將車して輸送業務についたと考えてよいであろう。この他、就の事例もある。

河南陔師西信里蘇解怒

車一兩爲鑾得騎士利成里留安國鄴載肩水倉麥小石卅五石輸居延弓一矢□二枚劍一

(肩水金閼漢簡 EJT21.21, A32)

この事例は「儻」とは記されていないが、類似的事例で、

□牛車一兩爲饒得騎士功歲里孫青弓就載肩水穀小石冊五石輸居延矛一刀一々

(肩水金閼漢簡 EJT27.5, A32)

と、「就載」と明記され、前者の「鄴載」は「就載」の誤りとみられる。就運する者が肩水金閼を通過する際に「將車」(將車している者)として記録されたとすれば、將車と就とは同じ者を指し、雇用に重きを置いた記録では就通過形態に重きを置けば將車ということであろう。⁽⁴³⁾ 肩水金閼を通過した河南郡の者は、このような業務にもついていることとなり、どちらかという商人や出資者・原販売者の委託を受けた運送業者的な色彩が強いようにも思われる。⁽⁴⁴⁾ 無論、商人として赴いて、積載物を売却し終えるなり積み下ろすなりして空いた荷車を有効活用した者もいたであろう。また、「建武三年候粟君所責寇恩事」冊書にみられる寇恩のように、運送のみならず運送した物品の販売を委託される者もいた。その点で、商人と運送業者を明確に区分する必要はないかもしれない。さらには、製品の販路を求めた手工業を主たる生業とする人々も含める必要もあろう。

いずれにせよ、河南郡雒陽をはじめ、事例数が多い郡県の民衆には、商人や運送業者(委託販売も含む)⁽⁴⁵⁾ など、商業・流通を生業とする者が想像以上に多いと思われる。商人であれば国家が示唆するまでもなく商業上の知識として、物資や労働力を売って貨幣を得やすい場所の一つが河西だと認識していたとしても不思議ではない。また張掖郡民が居延に赴いた事例にも、内郡各地の物品を河南郡出身者らが張掖郡の中心都市である饒得まで輸送し、それを張掖郡民が居延へ輸送した例があるのではないか。

以上の点から、漢代の全国的物流の一翼を担った民衆による辺郡への物品の輸送と販売について、河西方面では河南郡出身者が圧倒的な存在感を発揮しており、漢帝国の全国的物流の相当の部分を河南郡出身者が担っていた、

とみてよい。

おわりに

前漢後半期では、内郡からの物資を辺郡に輸送して販売し、内郡から賦錢として輸送された貨幣や辺郡の特産品、涼州であれば家畜と交換して戻る人々が多数存在していた。その際には出身県から通行証である伝の取得を必要とし、移動には一定の制限があった。しかし伝は申請者に問題がなければ基本的に発給されるものであり、漢は特定の物品の流通を規制し、人々の移動の状況を把握する意図はあるが、人々の移動そのものを厳格に抑制する意図はなかったとみられる。こうした状況下、辺郡は国家的物流のみでは不足する物資について、内郡から商品として持ち込まれる物資を購入し、内郡に貨幣を還流させた。内郡の人々ととり、辺郡は貨幣を得るための販路の一選択肢であり、国家的物流とは別のもう一つの内郡―辺郡のつながりが存在した。これは為政者にも国家的物流を補完する機能があると認識され、常平倉のようにそれを利用する政策が実施される場合もあった。

ただし、内郡の民衆の多くは直接河西などの辺郡へ赴くのではなく、居住地ないし近隣において生産物を販売するか、そうでなければ河西へ赴かずに委託販売することを選んでいたのである。すなわち、兵役・力役以外では、多くの内郡民衆と辺郡とは間接的なつながりを持ったことになる。この辺郡と内郡民衆との間に介在したのが、「爲家私市」の名目で伝を取得して肩水金閼を往来していた人々であり、彼らは商業や運送業を主たる生業としていた。彼らは河西地域の場合、地理的に河西に近いことに加え、元来が商業の活発な地域でもあった河南郡出

身者が圧倒的に多かった。

漢代には『史記』貨殖列伝の記載から、戦国期以来の経済圏が存在したとされるが、経済圏の枠をこえて、河南郡商人・河南郡運送業者が、自らの故地でもある黄河の中流域（中原）から西方、渭水流域・黄河上流域・河西まです幅広く活動圏としていた状況が浮かび上がる。河西四郡をはじめとする西北辺郡と内郡との結びつきは、制度的な国家的物流や兵役などによって維持される側面に加え、中原と西北とを往来する河南郡商人・運送業者によって維持されていた側面があるといえる。また同時に、従来は武帝期の経済政策により商工業者が没落したとされてきたが、⁽⁴⁷⁾その武帝期以降の史料である居延漢簡・肩水金閼漢簡からみる限り、商業の中心地とされる河南郡出身者がなお活躍している。本稿では彼らを「商人」として扱ったが、彼らの実態について明らかにできなかった点も多く、武帝期抑商政策の与えた影響を含め、他日を期したい。

註

(1) 郡守、秦官、掌治其郡、秩二千石。有丞、邊郡又有長史、掌兵馬。秩皆六百石。

(2) 邊郡太守各將萬騎、行障・塞・烽火追捕。置長史一人、掌兵馬。丞一人、治民。當兵行、領長史。置部都尉・千人・司馬・候・農都尉、皆不治民、不給衛士。

(3) 渡邊信一郎『漢代の財政と帝國編成』（同氏『中国古

代の財政と国家』第一部第五章、汲古書院、二〇一〇年）。

(4) 飯田祥子「前漢後半期における郡県民支配の変化——内郡・辺郡の分化から——」（『東洋学報』八六—三、二〇

〇四年）、渡邊信一郎『漢代の財政運営と国家的物流』（前掲註）(3) 同氏著書第一部第一章、汲古書院、二〇一〇年「初出一九八九」。

(5) 拙稿「前漢西北辺境と関東の成卒——居延漢簡にみえ

る兵士出身地の検討を通じて——」（拙著『漢代の地方官史と地域社会』第四部第二章、汲古書院、二〇〇八年「初出二〇〇〇」）。また周宇「居延関東戌卒考」（『国際簡牘学会会刊』三、二〇〇一年）参照。

(6) 伝舎は侯旭東「伝舎使用与漢帝国日常統治」（『中国史研究』二〇〇八年第一期）参照。

(7) 例えば漢代にも、鉄製農器を遠方の鉄官まで買いに行くと、[膏腴の日を棄て、遠く田器を市えば、則ち良時に後れる]（『塩鉄論』卷六水旱第三十六）との認識がみられる。

(8) 有名な「七科謫」を説明した『史記』大宛列伝の『史記正義』張晏註に、「吏有罪一、亡命二、贅増三、…（下略）」とあり、この「亡命」は戸籍離脱者を指し、犯罪者とみなされたとされてきた。堀敏一「漢代の七科謫身分とその起源——商人身分その他」（同氏『中国古代の身分制——良と賤——』第二篇第四章、汲古書院、一九八七年「初出一九八二」）など参照。こうした解釈も、本籍地から遠く離れることが困難との印象へつながったであろう。

(9) 角谷常子「エチナ川流域の関について——肩水金関を中心に——」（『古シルクロードの軍事・行政システム——河西回廊を中心に——シルクロード学研究』二二、二〇〇

五年）。

(10) こうした官吏に準ずる存在については、拙稿「漢代の材官・騎士の身分と官吏任用資格」（前掲註（5））拙著第一部第二章「初出二〇〇四」で触れた。

(11) 無論、賦銭として納入する銅銭を得るために商行為を行なう、といった場合、純粹に個人的な動機ではないが、直接的に国家の要請によって商行為を行なっているのではなく、またそこで賃労働と商行為のいずれを選択するか、それをどこで行なうかについては、個人の選択によるものである。この点で「私用」という語句を用いることとした。

(12) 居延漢簡・肩水金関漢簡の伝については、大庭脩氏以来、国内外で極めて多くの專論が公表されている。本稿では伝自体の検討は行なわないため、それらは逐一掲げない。主として大庭脩「漢代の関所とパスポート」（同氏『秦漢法制史の研究』第五篇第一章、創文社、一九八二年「初出一九五四」）、富谷至「通行行政——通行証と関所」の一・二（同氏『文書行政の漢帝国 木簡・竹簡の時代』第三編第二章、名古屋大学出版会、二〇一〇年「初出二〇〇五」）、鷹取祐司「肩水金関遺址出土の通行証」（同氏編『古代中世東アジアの関所と交通制度』立命館大学、二〇一七年）を参考とした。

- (13) 鈴木直美「漢代フロンティア形成者のプロフィール——居延漢簡・肩水金閼漢簡にみる卒の年齢に着目して——」(拙編『周縁領域からみた秦漢帝国』六一書房、二〇一七年)の表1参照。

- (14) 青木俊介「肩水金閼漢簡の致と通関制度」(『日本秦漢史研究』一二、二〇一四年)。

- (15) 伝の本文に発信者として某県令長・丞など、または伝の印文の記載で某県令長・丞の印が記され県名がわかる場合、伝の発給県とみなした。ただし居延県に耕地を所有する隴西郡西県の者に対して居延県が発給した事例(EJT37.524)があり、この方法は若干の不確実性を伴う点、お断りしておきたい。

- (16) 例えば張家山漢簡「二年律令」捕律・一四三簡末尾には「興吏徒追盜賊、已受令而逋、以畏與論之」(史や人員を動員して盜賊を追捕するにあたり、すでに動員令を受けたのに逃亡した場合、「畏與」によって論断する)といった記述がみられる。

- (17) 簡番号はEJT9.62, 297, EJT10.313, EJT24.240, EJT25.15, EJT32.45, EJT33.39, 44+47, EJT37.160, 279, 284, 358, 524, 938, 1094, 213.18°。

- (18) この冊書について、内容面の議論としては謝桂華「建

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡 高村

- 武三年十二月候粟君所責寇恩事」考釈」(同氏『漢晉簡牘論叢』広西師範大学出版社、二〇一四年「初出日本語版一九九一、中文版二〇一三」、浅原達郎「牛不相当穀廿石」(『泉屋博古館紀要』一五、一九九八年)、裁判手続面からの議論として、榎山明「居延出土の冊書と漢代の聴訟」(同氏『中国古代訴訟制度の研究』京都大学学術出版会、二〇〇六年「初出一九九五」、鷹取祐司「候粟君所責寇恩事」冊書の再検討」(同氏『秦漢官文書の基礎的研究』第四部第四章、汲古書院、二〇一五年「初出二〇〇二」)参照。

- (19) 家属符については、前掲註(12)鷹取論考参照。

- (20) 鵜飼昌男「漢簡に見られる書信様式簡の検討」(大庭脩編『漢簡研究国際シンポジウム』⁹²報告書 漢簡研究の現状と展望』関西大学東西学術研究所、一九九三年)によると、書信は通常の公文書通伝制度によらず届けられる。書信を託せる人がいない場合などは、「爲家私使」という形で家族の誰かに持参させる、といったことが考えられよう。知人・家族間の書信と思われる事例は出土史料の中に多数の事例が存在している。

- (21) 当時の主要交通ルートについては、史念海「秦漢時期国内之交通路線」(同氏著『河山集』四、陝西師範大学出

版社、一九九一年）、侯旭東「皇帝的無奈——西漢末年的
 匱乏開支与制度變遷——」（『文史』二〇一五年第二輯）参
 照。

(22) 拙稿「前漢河西地域の社会——辺境防衛組織との関わり
 を中心に——」（前掲註（5）拙著第四部第三章「初出
 二〇〇六」、特に四四一頁参照。

(23) 永田英正「居延漢簡にみる候官についての一試論」
 （同氏著『居延漢簡の研究』第Ⅱ部第六章、同朋舎出版、
 一九八九年「初出一九七三」）。

(24) 佐原康夫「漢代の貨幣経済と社会」（同氏『漢代都市
 機構の研究』第四部第三章、汲古書院、二〇〇二年「初出
 一九九八」）。

(25) 張弘氏は、五口の家をモデルに錢納税を年間約一〇〇
 〇錢と試算しており、このためまず需要の融通性が比較的高い
 副業生産品、次に食糧を売却して貨幣を得なければならぬ理由と
 している。「戦国秦漢時期商人・商業資本与農村経済的関係」（同氏『戦国秦漢時期商人和商業資本研究』
 第四章第二節、齐鲁書社、二〇〇三年）。

(26) 多田狷介「漢代の地方商業について——豪族と小農民の
 關係を中心に——」（同氏『漢魏晋史の研究』上編第二章、汲古書院、
 一九九九年「初出一九六五」）。

(27) 黄今言『秦漢商品經濟研究』（人民出版社、二〇〇五年）第三章「秦漢商品交換与商業形態的發展」は、「爲家私市」と記された伝について、当時は出かけて品物を購買したり商品
 を交換したりするために国家の許可が必要で、随意に出かけられなかつたが、それでも小農民と市場との關係は密接であつたとしている。

(28) 角谷常子「居延漢簡にみえる売買關係についての一考察」（『東洋史研究』五二—四、一九九四年）。

(29) 河西での纖維製品の価格は、揚州地域の江蘇儀徵浦一〇一
 号前漢墓の木方記載布帛価格との比較試算によれば、前漢後期の
 絹の価格は、儀徵浦漢簡の価格は一匹五五〇錢、居延漢簡二七・一五、
 二一七・一七簡では一匹一四四〇錢、河西の四〇%以下であつた。
 丁邦友「漢代物価新探」（中国社会科学出版社、二〇〇九年）第四章「漢簡中的西物
 価」の一九六—一九八頁参照。前掲註（27）黄氏著書第五章「秦漢商品
 価格与貨幣在流通的地位」の二三六—二四一頁でも、『九章算術』
 を用いて同様の指摘がある。陳直「關於兩漢的手工業」（同氏『兩漢
 經濟史料論叢』所収、陝西人民出版社、一九五八年）によれば、齊・蜀・襄
 邑・河内・三輔・鉅鹿などが漢代纖維製品の主要産地で、河西
 での生産があつたとしても需要を満たせなかつたのではな

いか。

- (30) 佐原康夫「江陵鳳凰山漢簡再考」(『東洋史研究』六一—三、二〇〇二年)で指摘されるように、鳳凰山一〇号墓簡牘二号木牘「中販共待約」は、七人が共同で行なう商売に関する規約であり、漢代では必要に応じて共同での商行為が行われていた。

- (31) この問題については国内のみでも多くの研究者が議論を展開しており、枚挙に暇がない。本稿では国家的物流を議論するものではないため、これらの研究を踏まえた最近の研究である前掲註(4)渡邊信一郎「漢代の財政運営と国家的物流」を例示しておく。

- (32) 李均明「居延漢簡債務文書述略」(同氏『初学録』蘭台出版社、一九九九年「初出一九八六」、前掲註(28)角谷論考など参照。

- (33) 壽昌遂曰令邊郡皆築倉、以穀賤時增其買而糶、以利農、穀貴時減買而糶、名曰「常平倉」。民便之。

- (34) 山田勝芳「専売・均輸平準、及び諸收入」(同氏『秦漢財政收入の研究』第六章、汲古書院、一九九三年)参照。

- (35) 宣帝期の有紀年簡が多い理由については、一九三〇・七〇年代居延漢簡を用いた研究を参考すると、裴錫圭「從出土文字資料看秦和西漢時代官有農田的經營」(臧振華

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡

高村

主編『中国考古学与歴史学之整合研究』中央研究院歴史語言研究所會議論文集之四、中央研究院、一九九七年)に元帝期ごろに屯田が衰退するとの指摘があり、宣帝期以降、河西の開発が進み匈奴との戦闘も収束した段階で、官需・民需とも減少したなどの推測が可能であろう。

- (36) 礼忠簡については、永田英正「礼忠簡と徐宗簡について」(前掲註(23)同氏著書第Ⅱ部第八章「初出一九六九」、同「礼忠簡と徐宗簡研究の展開——居延新簡の発見を契機として——」(『史窓』五八、二〇〇一年)。

- (37) 周地、柳・七星・張之分野也。今之河南雒陽・穀成・平陰・偃師・鞏・緱氏、是其分也。(中略)周人之失、巧偽趨利、貴財賤義、高富下貧、憚爲商賈、不好仕宦。

- (38) 黄今言「論兩漢時期的農村集市貿易」(同氏『秦漢經濟史論考』中国社会科学出版社、二〇〇〇年「初出一九九九」)。

- (39) 地皇三年、南陽荒饑、諸家賓客多爲小盜。光武避更新野、因賣穀於宛。

- (40) 宛亦一都會也。俗雜好事業、多賈。簡番号はEJT10.121, 267, 315, EJT31.20, 34, EJT33.59, EJT37.733, EJT37.1444, EJC614。

- (41) 溫・軹西賈上黨、北賈趙・中山。簡番号はEJT1.155,

ETJ4.19, ETJ9.74, 82, 93, ETJ21.219, ETJ23.56, ETJ24.570, 715, 922, ETJ25.7, 103, ETJ26.35, 75, ETJ4H2.5, EJC643, 334.28°

(42) 任安、滎陽人也。少孤貧困、爲人將車之長安、留求事爲小吏、未有因縁也、因占著名數。

(43) 居延漢簡にみえる就運や將車については、佐原康夫「居延漢簡に見える物資の輸送について」(『東洋史研究』五〇—一、一九九一年)に主に拠った。他に蔡宜靜「漢代居延『就』運探研」(『簡牘學報』一七、一九九九年)など。なお張俊民「從漢簡談漢代西北辺郡運輸的幾個問題」(同氏『簡牘學論稿』聚沙篇)甘肅教育出版社、二〇一四年)では、就運は現地の者が多いとする。とすると、將車と就人の間に何らかの差があることも考えられ、例えば河南郡などで運送業者がまとめて徵発されたものが將車であるといった例があり得るが、現状では不明である。王子今「漢簡所見『就人』与『將車人』」(同氏著『秦漢交通考古』中國社會科學出版社、二〇一五年)では、兩者を別とし、車や牛馬の所有權の有無による可能性を示唆するが、一概にそうともいえない。

(44) 漢代の運送業については、前掲註(43)各論考の他、王子今『秦漢交通史稿』(中共中央党校出版社、一九九四

年)中の第十二章「秦漢運輸業」参照。

(45) 委託販売の場合、「建武三年候粟君所責寇恩事」の粟君の妻のように同道して立ち会う依頼主・出資者もいたから、同様に「爲家私市」として伝を取得し、河南郡の運送業者・商人に同道して河西に赴いた者が存在したことも想定されよう。

(46) こうした經濟圏について近年では、前掲註(27)黃今言論考、柿沼陽平「戰国時代における楚の都市と經濟」(『東洋文化研究』一七、二〇一五年)などが論じている。

(47) 概説でもこのような視点による説明がされる。例えば西嶋定生『秦漢帝國 中国古代帝國の興亡』(講談社、一九九七年)の第四章「武帝時代の外征と内政」など。

※本稿使用の出土史料テキストは以下の通り。

敦煌漢簡……甘肅省文物考古研究所編『敦煌漢簡』中華書局、一九九一年

一九三〇年代居延漢簡……謝桂華・李均明・朱国焯「居延漢簡釈文合校」文物出版社、一九八七年・勞幹「居延漢簡 図版之部」中央研究院歷史語言研究所專刊之二十一、中央研究院歷史語言研究所、一九五七年・簡牘整理小組編『居延漢簡』中央研究院歷史語言研究所專刊之一〇九、中

央研究院歴史語言研究所、(卷)二〇一四年、(貳)二〇一

五年、(参)二〇一六年

一九七〇年代居延漢簡……甘肅省文物考古研究所・甘肅省

博物館・文化部古文獻研究室・中国社会科学院歴史研究所

『居延新簡 甲渠候官与第四隧』中華書局、一九九四年

肩水金閼漢簡……甘肅簡牘保護研究中心・甘肅省文物考古

研究所・甘肅省博物館・中国文化遺產研究院古文獻研究室・

中国社会科学院簡帛研究中心『肩水金閼漢簡』中西書局、

(卷)二〇一一年、(貳)二〇一二年、(参)二〇一三年、

(肆)二〇一五年、(伍)二〇一六年

付記 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究

(C)「西北周縁領域の歴史的展開からみた中国古代史の再構
築に関する基礎的研究」(課題番号15K02911)による成果の
一部である。

(明治大学文学部史学地理学科 准教授)

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡

高村

二六五

附表 使用伝・致簡番号一覧表

郡国	簡番号
京兆尹	伝:T9.92, T10.229, T24.132, T37.1076, 1380 / 致(A):T9.24, 98, 128, T22.60, T23.746, T26.193, T37.997, 1022, 1081, 1085, 1381, F3.131, 133, D70, 53.15, 62.13 / 致(B):T3.52, T9.258, T10.152, 289, T23.923, T24.579, T26.106
左馮翊	伝:T9.29, T37.157 / 致(A):T10.181
右扶風	伝:T2.29, T23.897, T24.532, T32.16, T37.523, C654 / 致(A):T8.4, 84, T23.1005, T31.143, T37.170, 468, 858, 1505, 1586, H2.41, F3.572 / 致(B):T22.62, T37.107, 892, 1114, 1511, C14
弘農	致(A):T1.54, T2.35, T37.986, 1493 / 致(B):T28.70, C10
河南	伝:T1.80, T10.40, T15.5, T21.64, 175, T24.23, 266, 977, T25.166, 185, T30.243, T33.41, T37.692, 752, 1075, 243.24, 334.20, 334.40 / 致(A):T1.6, T4.17, 38, 52, T9.40, 137, 241, T10.104, 129, 148, 176, 190, 427, T21.16, 49, T23.58, 108, 146, 974, T24.50, 242, T25.5, T27.30, T30.266, T32.4, T33.87, T35.5, T37.64, 78, 190, 458, 662, 703, 713, 856, 859, 991, 1084, 1209, 1220, 1386, 1445, 1587, H2.40, F3.253, T4H3, D204, C26, 43.7, 43.16+18, 62.24 / 致(B):T1.115, 128, 131, T2.42, 64, T3.37, T8.25, T10.157, 182, 290, T14.15, T21.120, T24.405, 495, 897, T25.159, T29.102, T31.38, T35.11, T37.77, 247, 319, 405, 564, 571, 633, 634, 764, 899, 933, 1033, 1109, 1141, 1245, 1330, 1476, F1.39, F3.544, D52, C120, C143, C520, 334.45
河内	伝:T24.570, T25.7, H2.5 / 致(A):T1.155, T9.82, 93, T21.219, 229, T23.56, T26.35, C643, 334.28 / 致(B): T1.114, T3.83, T4.8, 19, T9.74, T24.270, 337, T15, 922, T25.103, T26.75
河東	致(A):T14.5, T24.241 / 致(B):T3.69, 88, T8.24, T23.16, 636, T24.863, T25.94, 15.6
太原	致(A):T5.61
上党	致(B):T4.20, C413
魏	致(A):T37.994, 15.14 / 致(B):T21.195, 438, T26.198, T27.14, T37.328, C51, C157, C575
鉅鹿	致(B):C628
東	致(B):T8.58, T10.128, T29.23
陳留	致(B):T21.44
定陶・濟陰	致(A):T33.61 / 致(B):T6.138, T21.51, T24.328, T37.845
大河	致(B):T2.100, T24.258, 550, 766, 968, 974
淮陽	致(A): T33.85, C20 / 致(B):T2.2, 71, 72, 73, 74, T10.41, T21.221, 265, 313, 439, 450, T24.238, 956, T28.36, T29.40, T31.145, T37.1496
潁川	致(B):T25.99
汝南	伝:H1.14 / 致(B):T21.315, C560
梁	伝:T35.77 / 致(B):T11.9, T21.37, 424, 437, T24.971
沛	致(B):T21.358
魯	致(A):T27.9, 19, T37.847, 988

南陽	伝:T10.120, 121, 315, T31.20, 34, T37.733／致(A):T33.59, 91, T37.1444／致(B):T6.49, 96, T10.267, T25.171, T4H35, C415, C556, C614
齊	伝:T37.1095, 1462+1471／致(A):T9.3, 28, 致(B):T9.20, 126, T37.470
金縢	致(B):T10.299, 300, 301
蜀	致(B):T37.969
安定	致(A):C19
隴西	致(A):T37.1155／致(B):T9.114
武威	致(A):T37.51
金城	伝:T37.1451
張掖	伝:T2.56, T6.39, T9.62, 177, 297, T10.313, T23.335, T24.42, 240, T25.15, T32.45, T33.39, 40, 44+47, T37.52, 160, 279, 284, 358, 524, 932, 938, 968, 1047, 1094, F3.175, 15.19, 213.28／致(A):T6.141, T9.41, 238, T10.63, 162, T21.238, 262, T23.13, T23.55, 59, 773, 774, 924, 970, 1027, T24.48, 121, 170, 282, 515, 951, T26.46, 63, 118, T27.1, T29.135, T30.9, 10, 20, 132, 133, 152, 160, T31.6, 146, 159, T35.4, T37.79, 110, 742, 920, 966, 971, 992, 995, 1003, 1077, 1101, 1123, 1154, 1156, 1324, 1413, 1428, 1446, 1466, 1495, 1582, 1583, H1.8, 23, H2.16, 17, 64, 70, F3.49+581, 135, 240, 369, D1, 208+147, C154, C240, C339, C414, C588, C609, 15.20, 37.32, 334.33, 340.39／致(B):T4.76, T6.54, T7.37, T9.16, 123, 143, 182, 362, T10.292, T21.223, 268, 272, T22.120, T23.467, 1015, T24.167, T25.92, T27.56, T28.42, T29.2, T37.101, 102, 357, 411, 431, 499, 536, 621, 827, 1104, 1108, 1125, 1224, 1333, 1414, F3.136+266, F3.314, D210, C428, 15.21, 51.3, 140.16
酒泉	伝:495.12+506.20／致(A):T21.224, T23.303, T24.814, T26.120, T37.1160／致(B):T6.50, 137, T8.61, T9.149, T15.4, T23.379, T24.156, T25.97, T37.1336, 1399, H2.67, C477, 340.40
敦煌	致(B):T27.61
代	致(A):T34.7

E1T・E1F・E1D・E1C・の E1, E1T4H の E1T4 の表記はそれぞれ省略した。

王莽期の地名は「漢書」地理志所載の前漢期の地名として集計した。

漢朝に「大常郡」に属すとされる渡邑は「漢書」地理志での所属郡国に入れて集計した。

使用伝有紀年簡番号（あみかけは張掖郡民のもの）

宣帝期（～五鳳二年） 11例	本始 2 (T21.64)・本始 5 (<u>T2.56</u> , H1.14)・地節 2 (T24.532, T25.7)・元康 1 (<u>T25.15</u>)・元康 2 (213.18)・元康 4 (T31.20)・神爵 5 (T37.1380)・五鳳 1 (<u>T37.521</u>)・五鳳 2 (T9.92, T37.523)
宣帝期(五鳳三年～) 11例	五鳳 3 (T37.524, 1075)・五鳳 4 (T37.1076)・甘露 1 (T9.26)・甘露 2 (<u>T10.313</u>)・甘露 4 (<u>T9.62</u> , T10.120, 121, 315, 334.20)・黄龍 1 (T33.41)
元帝期 5 例	初元 1 (<u>T32.45</u>)・初元 2 (T21.175)・初元 4 (T32.16, <u>T37.279</u>)・永光 2 (<u>T33.40</u>)
成帝期 5 例	鸿嘉 2 (<u>T6.39</u>)・鸿嘉 4 (<u>T9.177</u>)・永始 2 (T24.23)・永始 5 (<u>15.19</u>)・元延 1 (T37.1451)

肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡 高村

哀帝期 4 例	建平 2 (T37.160)・建平 3 (T15.5, T37.1462+1471)・元寿 2 (T23.897)
平帝期 1 例	元始 5 (T23.335)
王莽期 1 例	始建国 1 (F3.175)

THE TOYO GAKUHO

Vol.99, No.3 - December 2017

(THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT
OF THE TOYO BUNKO)

Relations between Frontier and Interior Commanderies during the
Latter Part of the Former Han as Seen from the Movement of People
through Jianshui Jinguan

TAKAMURA Takeyuki

This article examines the kinds of people who passed through Jianshui Jinguan 肩水金關, a Han period garrisoned checkpoint in the northwestern frontier region, in order to clarify the mobility of commoners and the actual relationship between frontier and interior commanderies (*jun* 郡), utilizing mainly the Han period bamboo and wooden slips unearthed at Jianshui Jinguan.

Although carrying a passport (*chuan* 傳) was required when travelling during the Han Period, there were no strict institutional restrictions on long-distance travel, even in the case of commoners on the road for personal reasons. The author's examination of the Han bamboo and wooden slips from Jianshui Jinguan reveals that not a few people from the interior commanderies passed through this checkpoint, a considerable number of whom had obtained passports for the purpose of "private commerce for family business," and shows that many people were transporting goods from the interior to the frontier commanderies to sell and then returning with cash that had been originally sent as taxes from the interior commanderies. Thus, not only did frontier commanderies obtain from the interior goods that the state alone could not distribute in sufficient quantities, but they were also sending back money to the interior. Such trans-actions reveal one more link between the interior and frontier commanderies separate from the state-controlled distribution of goods between the two regions.

That being said, the majority of the people of the interior commanderies did not directly traded their products with the frontier commanderies of Hexi

河西 and elsewhere, but chose either to stay at home to sell their wares locally, or to commission agents to carry and peddle them in the frontier commanderies. Therefore, most of the private-sector interaction between interior and frontier commanderies was in fact conducted by professional merchants and transport agents acting on behalf of commoners of the interior, passing through Jianshui Jinguan with passports obtained on the pretext of “private commerce for family business.” In the case of Hexi, the overwhelming majority of these agents were from the nearby commanderies of Henan 河南, where commerce had traditionally flourished. In other words, the actual interaction that occurred between the northwestern frontier commanderies, starting with the four commanderies of Hexi, and the interior commanderies was characterized by formal state-operated commodity distribution and military service, on the one hand, and by merchants and transport agents from the commanderies of Henan travelling to and from the interior and the frontier on behalf of clients.

The Exchange of Information between Central and Local Governments during the Qing Period: An Analysis of the *Titang* System

YIN Qing

This article focuses on the actual functions of the post of *titang* 提塘 and the operations of the *tang* 塘 departments of official couriers which he commanded, in order to clarify how information was exchanged between the central and local governments during the Qing period. Although the post of *titang* was continued from the Ming Dynasty, local *titangs* set up at military bases during the Ming era were shut down in the early Qing period, leaving only *zhujing titang* 駐京提塘 in Beijing and *zhusheng titang* 駐省提塘 in the provincial capitals, the role of whom were stipulated in the Collected Statutes of the Qing Dynasty (*Daqing Huidian* 大清會典).

Both the posts of *zhujing titang* and *zhusheng titang* were held by lower-ranking officers of the Green Standard Army (Lüying 綠營), whose duty was to deliver official documents exchanged between central government bureaus such as the Six Boards (Liubu 六部) and local administrative offices, as well as the Peking Gazette (*dibao* 邸報) which contained information of the central